

保育者養成における人形劇の活用

—丹下進の人形劇指導—

米谷 淳

(神戸大学教授)

向平 知絵

(大学院発達教育学研究科

児童学専攻)

棚橋 美代子

(児童学科教授)

はじめに

日本の幼児教育・保育における人形劇の歴史は長い。1926年に倉橋惣三が東京女子高等師範学校附属幼稚園で「お茶の水人形座」^{註1)}を初演し、その後附属幼稚園で実演されていた人形劇芝居の脚本集¹⁾が出版され、全国の保育者の集まりで実演されていった(沖2000)²⁾。乾孝は戦後まもなく人形劇サークル「つくし座」を主宰して30年間保育者等と人形劇活動を行い(いぬい1971)³⁾、オリジナル脚本集を盛り込んだ入門書(いぬい1979)⁴⁾を公表している。現在は多くの人形劇団が、各地の幼稚園・保育所を巡回している。

いぬい(1971)³⁾は子どもの情操の発達にとって人形劇鑑賞がすぐれていることを論じている。人形劇を子どもに見せる意味について、いぬい(1963)⁵⁾は調査結果を踏まえて次のように述べている。

「わたしたちは、児童劇・映画・紙芝居・人形劇などの見物席の子どもたちについて、長年調査を続けてきましたが、人形劇にはそれ独特の働きがあることを発見しました。子どもたちはたいていの場合、舞台上の一番身近な人物に自分を投げ込んで、劇の内容を生活する傾向が強く、全体を眺めまわした上で、ひとりひとりの立場を理解したり、ある人物の行動を批判したりするのは苦手です。ところが、人形劇だと、人間の演ずる劇よりも、つきはなした見方に早く進めるらしいことがわかりました。」(10頁)

「つきはなした見方で、ある真実をとらえる

という楽しさを正しい方向に伸ばすために、人形劇はもっと大きな責任と誇りをもってよいのではないのでしょうか？」(11頁)

確かに人形劇は保育現場でよく鑑賞されている。三宅・向平(2007)⁶⁾が福山市の保育園を対象に行った質問紙調査によれば、有効回答した24園のうち23園が人形劇活動を保育の中で行っており、18園が普段の保育中に簡単な人形を使って子どもたちと接している。「設定保育の導入時の説明を人形劇を使うことで、わかりやすくする」(13園)、「子どもたちのけんかの仲裁役として」(3園)、「あまり話したがらない子どもたちに話しかけるとき」(2園)などの場面で人形を使って子どもと接している。ところが、「人形劇の人形の作り方や演技方の基本的なことを勉強する機会があれば参加したいか」という質問に対して、「ぜひ参加したい」と回答したのは5園であり、17園は「都合がつけば参加したい」と回答した。調査から、保育者が人形や人形劇を保育に活用するためには基本を習得する講習会や練習時間が必要だが、時間も含めなかなか余裕がとれない保育園が少くない現状が浮かび上がってきた。

人形劇を保育者が保育中に子どもの前で演じることの意義は大きいと考える。懸命に演じた人形劇で子どもが楽しむ姿は保育者の励みとなり、その経験は保育者自身の成長にもつながる。沖(2000)²⁾は、「下手でもよい」「難しい稽古はいらない」「簡単なものでよい」と率先垂範して人形劇を演じる倉橋惣三とともに「子どもを喜ばせることを求めて、準備や演技方を工夫し

てきた」及川ふみ・菊池ふじのら東京女子高等師範学校附属幼稚園の保育者の様子を描写し、「まずは、保育者が演じ手になること。そして、喜ぶ子どもの顔を見ること。即ち、保育する者の中に子どもに励まされた体験をもつ者を増やすこと。それが倉橋の求めたものだった。」(34頁)と結んでいる。しかしながら、調査結果が示すように、研修機会や時間が十分ないことから、現状ではこうした励みや成長を実感できる保育者はそれほど多くない。

むろん、人形劇の実演も制作も保育者だけでなく保育者養成校の学生の保育技能の育成や人間としての成長にとっても大いに資するに違いない。^{注3)} 保育者養成校で人形劇を実習に取り入れているところは、人形劇が伝統的な文化財であり児童文化財でもあること、子どもの情操発達を促すこと、子どもとコミュニケーションを図る教材として有効であることと同時に、学生に対する教育効果を期待してのことと考えられる。40年以上毎年学生が人形劇制作に取り組んでいる例もある。^{注2)} 最近、保育者養成校に入学してくる学生に社会的技能や身体表現能力の乏しい者が少なくないことが問題となってきている。対応策として「日常生活のマナーや基本的な生活技術の理解」、「子どもの表出や表現の欲求を理解し、コミュニケーションを形成するための基本的な素養と保育実践に必要な技能」に焦点をあてたカリキュラムに加えて、児童文化を学習するカリキュラムを新たに設けることにより、旧カリキュラムよりそれらの教育効果を有意に高めた事例が報告されている(守山2006)⁷⁾。また、ある保育者養成校は、「卒後、現場で適応できなく多くの保育者が退職したり、在学中にもっと実践的な学習をすべきであったと述べる卒業生」の声を踏まえて地域の幼児教育現場との連携による体験学習を重視した保育者養成プログラムを推進しており、「学生は大学での講義を百回聴くより、一回の現場体験、子どもの前で発表することにより、より大きな感動と指導技術を獲得できる」(3頁)としている(高橋・富永・中村2006)⁸⁾。

このように人形劇を制作し、それを保育現場

で演じることは、青年期にある学生が社会人となっていくためにも、また、学習への動機づけを強めるためにも意味があると考えられる。確かに、倉橋惣三が「お茶の水人形座」を指導した時のように、「手づくり」で一からつくりあげ、工夫をしながら徐々に熟達していくという過程は大切である。しかし他方、演技を中心に学ぶことも重要である。

われわれは一昨年より保育者養成校における新しい教育プログラムの開発を進めてきた。¹³⁾ 高度で専門的な保育技能と対人技能を備えた実践力を備えた保育者を養成するために、専門家による人形劇の授業を展開している。また演習科目の一領域で、巡回公演を通して人形劇の経験を積ませながら、ライティング及び集団討議や一対一の面接による指導のある振り返り(guided reflection)¹⁴⁾をさせて、経験からの気づきや学びをさらなる自己の成長・発達につなげようとした。われわれは授業を観察し^{13), 15)}、公演前後の指導を観察した。さらに、振り返りのグループセッションのファシリテーターや面接者となって、この教育実践をさまざまな角度からとらえるための資料を収集した。さらに、授業で学生に向かって語りかけた様々な言葉の背景や意味をより詳細に調べるために、人形劇指導者に面接調査を行った。こうした作業を通して、専門の人形劇指導者による人形劇の教育を通して、学生が人形の作り方・使い方・人形劇作品の演じ方を習得するだけでなく、保育における人形劇活用の意義、さらには、子どもや児童文化についての深く幅広い見方を獲得していくこと、さらに、それらが後輩への指導や、各自の保育実習先での人形劇の上演や人形の活用へと発展していくことがわかってきた。

この論文では、人形劇団を主宰し、長年保育者養成校で学生の人形劇指導に携わってきた丹下進氏への面接調査と、T女子大学で丹下氏から人形劇作品「なかよし」(丹下1966)⁹⁾等の指導を受けた学生たちの巡回公演中のふりかえりの手記をもとに、人形劇指導の意味と効果性について考察を加える。^{注4)}

本論に入る前に、いま少し、われわれの研究

におけるこの論文の位置づけを説明する。丹下氏の人形劇の授業では、保育所・幼稚園の子どもたちの前で上演している「なかよし」を丹下氏自らが演じてみせることから始まる。学生はこれを見て、人形劇と丹下氏に魅了された。¹⁵⁾すでに報告したように、丹下氏が演じる「なかよし」に対して保育園の子どもたちは、3歳児でも興味をもって楽しそうに鑑賞し、場面場面で豊かに反応した。¹⁶⁾また、授業中に学生たちを前に出させて、舞台の上で人形にさまざまな動作や演技をさせながら、細かい指導をしていく場面や、指導によりみちがえるように学生の動きがよくなっていくことを、われわれ3人が実際に目の当たりにした。¹⁵⁾こうした指導法の詳細については、改めて別な機会に報告する。この論文は副題を「丹下氏の人形劇指導」としているが、ここでは指導法を詳らかにするのではなく、まず、丹下氏の語りをもとに人形劇指導の基盤となる思想や精神を浮かび上げたい。指導も教育も基本は指導者・教育者の姿勢であり態度である。すなわち、思想や精神こそが指導・教育の核心であると考え。次に、学生の手記をもとに、学生が丹下氏の人形劇指導とその後の実践からどのような気づきや学びを得たかを考察する。学生の手記は公演先での経験や他の学生との関係について記したものも含まれる。それは、丹下氏が学生に及ぼした影響力、すなわち、指導力の確かさが伺えるものであった。こうした理由により、丹下氏の語りと学生の手記をもとに、丹下氏の人形劇指導の特長について論じることにした。

I 目的

丹下氏への面接調査により彼の人形劇や子どもについての考え方を聞き出し、それを基に人形劇指導を受けることの意味を考察する。次に、K女子大学の「保育技能実習」(4年次配当)と「児童学演習Ⅰ」(児童文化領域)で丹下氏から人形劇指導を受けた学生たちが巡回公演中に書いた手記を基に、人形劇公演を通して学生がどのような気づきを得たかを考察する。

II 方法

丹下氏への面接調査は2006年8月28日の午後、K女子大学の教室で筆者らを含む複数の教員と学生が丹下氏を囲む形で約2時間にわたって行われた。当日、午前中に京都府宇治市のN保育園で丹下氏が人形劇公演を行っており、面接調査は公演注¹⁵⁾のビデオ録画、及び公演中の保育園児を映したビデオ録画を同時に再生しながら、丹下氏が随時再生を中止させ、あるいは再開させながらコメントを加える形式で進められた。面接調査の初めから終わりまでデジタルビデオとICレコーダーに録音し、それを原稿に起こした。

8月16日～18日の学生チームによる人形劇巡回公演に参加した13名のうち4年生1名を除く12名が16日と17日の終わりに、予め用意した「人形劇記録用紙」に手記を書いた。記録用紙にはその日演じた「演目」「役名」「今日の反省(上演をふりかえって)」「気づき」を記入する欄が設けられていた。当日の役割りが司会をしたり見学であったりしても記入するよう依頼した。12名の学生チーム(全員女子)の内訳は、4年生4名、3年生6名、2年生(特別参加)2名であった。巡回公演1日目(16日)は大府市にある子ども病院で約30名の入院中の子どもたちを前に1回の公演(「なかよし」と「おおきなかぶ」の2作品)を行った。2日目(17日)は長野市にある子ども病院内で3箇所、のべ3回の公演(「なかよし」、「おおきなかぶ」、腹話術、フランネル絵)を行った。1回目は、屋上にベッドや車椅子を移動して集まった子どもの前で演じた。2回目は病棟内のプレイルームで10名前後の入院中の子どもを前に行った。別の病棟のプレイルームで5名前後の子どもを前に3回目の公演を行ったが、それと並行して一部の学生が病棟を巡回しながら腹話術や簡単な人形劇をベッドサイドで演じた。

III 面接調査の結果

—丹下氏の子ども観、人形劇論、芸術文化論—

以下に、丹下氏の主なコメントを区切って、

文脈がわかるように時系列的に並べる。テープ起こしの原文の文体を改めて表現を統一し、キーワードと思われる語句を見出しにした。

1. 内言

- ・（最初の演目である台詞のない人形劇を見て）最初、「おもしろいね、お人形さん」と言っている子がいました。こっちが台詞を言わないだけに、子どもたちがいろいろしゃべって見ている。だんだん外言でしゃべる量が減っていき、内言を働かせていく方向に移動していくんだなあと感じた。
- ・自分で理解したことをすぐ口からぱっと出してずっとしゃべっている子と、最初から終わりまで内言を働かせている子がいるのではないか。そのあたりが、年齢によってどんな違いが起こってくるのか、また、ことばを獲得していない子どもでも内言が働いていないのかということ、どうやって探っていっていいだろうか。

2. 集中／大人と子どもの違い／指導法

- ・（ロバの人形劇で最初にロバが出ず、しばらく音楽だけが聞こえているところを見て）最初音楽だけでね、しばらく何も出てこない。この時に荒れた園の子どもたちは、「出てこーい！」「早く出てこーい」ってなる。今日の子供たちは何も言わない。じーっと待っている。
- ・（蝶々が飛んで出てくるところで）これ（子どもたちは）蝶々を見ているんですね。何でここは、えらい集中しているのかね。何にもおもしろくないところなのにね。この後どうするのかなっていうときに、子どもはしーんとしている。「この後どうなるのかな」という中身は、大人と子どもと相当違う。僕の指導はそこを深めていく。もっとじっくりやった方がいいというふうに。

3. 人形劇を子どもに見せる意味／優秀な母親の態度

- ・子どもたちが椅子席に座って人形劇を見ているとき、子どもの主体性が最も守られている。

- ・大人に監視されているという意識が全くないうち、子どもは最も自発的で主体的で創造的である。
 - ・どこを見ようがどうやって楽しもうが僕の勝手っていう時間がものすごく大事。
 - ・自分が楽しい世界へ入り込んでしまうお母さんもいる。子どもの質問に一切答えない。そういうお母さんの方が、子ども自身の力を作るっている点では優秀なお母さんではないか。
 - ・人形劇の場合は、人形の表情が変化しないが、変化したように感じながら見ている。怒ってもいない人形の表情が怒ったように見えたり、笑ってもいない人形の表情が笑ったかのように見えたりする。台詞という声で仕掛ける子どもの頭の中に子ども自身が作った絵ができる。まさに想像力。
 - ・例えば、「おいこらー」（優しい感じで）っていうと、優しそうな顔を一応形として思い浮かべる。「おい！こら！」（強い調子で）っていうと、今から怒りかけるかなっていう顔。「おい！！こら～！」（もっと強い調子で）っていうと、もう怒っちゃった顔。3歳児くらいになると3つの違う顔が頭の中に絵として思い浮かべられる。そこで、3歳児くらいから入場料を頂くというのが世界共通になっている。
 - ・「いない、いない、ばー」のように、子どもの想像力を鍛えていく遊びは昔からあった。
- ### 4. 芝居とテレビの違い／人間の目とカメラとの違い／自分の中に認識が入る瞬間
- ・AとBが登場してきてAがBの悪口をいっている。そのとき、生の芝居なら、悪口を言っているAを見るか悪口を言われているBを見るか選べる。どんな小さい子も自分の意志で決める。主体性が守られているからそういうことができる、テレビの場合は、悪口を言っているAがアップされているときBは見えない。
 - ・人間の目は自分の意志が定まらないとピントが合わないようになっている。カメラは

同じ位置にあるものは、同じようにピントが合って2人とも撮れる。人間の目は、ある程度離れると、どっちを見ようかという意志が定まらなると見ることができない。

- ・そういう弱点だけれども、よく自分の意志が定まったときに最もよく見える状態になるってことは、また、プラス面でもある。自分の意志で物をつかんでみたときが最高の認識を得ると言われる所以はそこにある。いつも指示されて見る子は認識力がそれだけ足りなくなる。

- ・「ほらほら、あれ見てごらん!」「ほらほら、あれきれいでしょ!」とか言われて見たときではなく、自分で、誰に頼まれることもせず、「何だこれは〜!」「うわー!きれい〜!」とか言って目が輝いたときが一番自分の中にきちっと認識が入る瞬間である。

5. みんなと一緒に共有する世界をくぐり抜ける体感／人間の豊かさ／グループで人形劇をやる意味

- ・みんなと一緒に笑ったとかね、みんなと一緒ににはらはらしたドキドキした、このみんなと一緒に共有する世界をくぐり抜けるときに得られる気持ちよい体感を積み重ねられていく子どもと、一切そういうことのない子どもとでは、その後人間の豊かさが育っていくという点で違いが生まれてくるのではないか。
- ・みんなと一緒にいろんなことをやって苦労して成し遂げた体験をした子としない子の差は大きい。
- ・人形劇制作にあたり、「こんな面倒くさいことやるの?」と不満を言う学生がいるが、稽古をして演じて、ほんの少し子どもが楽しただけで「もう少し稽古やればよかった」なんて、みんなレポート書いて来る。この体験がものすごく大事だと思う所以はそこにある。
- ・心が一つになったときの、感覚的・快感みたいなものが子どもの中に成立するということのすごさ

6. ことばを獲得する前に実感を自分の中に取

り込むことの大事さ／2歳児

- ・ことばを獲得する以前から内言が働いているって言う先生がいて、それではとしたことばを獲得していないのに、「ああすてき!」とか「ああ気持ちがいい!」とか、何かそういう、「ああ明るい!」「ああ嫌だ!」「ああいい!」という実感をいろいろと自分の中に取り込んでいくことは、ことばを獲得していくときに一番大事。

- ・(2歳児の様子を再現しながら)でも、じっと目をこんなにして人形劇を見ている子どもは何かを感じ取っている。それは絶対に値打ちのあることだ。

7. 思考／5歳児／意味の広がり／演技の幅

- ・年齢が高くなると思考の凝らし方が違ってくる。思考は共通点と違いを明確にすること。
- ・5歳児なら、5年間の生活体験の中で「これは絶対にこうだ」と思っていることや、「これはまだあやふやだ」ということをいっぱい抱えたまま、うそこの世界の中に飛び込んで、そのうそこの世界の中に登場して、また登場人物の言動を自分の価値観とちゃんと並べて比べている。
- ・だから、子どもが感じる意味はそれぞれ微妙な違いがあり、幅広くある。子どもがいろんな風に捉えながら、そして自分の意味の捉え方を繰り返していく中で、同じ意味でもちょっと違った意味、さらにちょっと違った意味という風に、一つの演技の幅がぐっと広がっていく。

8. 協感覚／5つの感覚の総動員／人間的自由の拡大

- ・動きがことばになったり、意味を成したりする、あるいは、そこに使われている音が、ある意味を感じさせてくれたり、あることばになったり、音で動きを感じたり、あるいは、その動きが音を感じさせたりとか、動きが色を感じさせてくれたり、色の組み合わせが音を感じさせてくれたりというふうに、5つの感覚が総動員されて、その子の中でよく練り上げられて、その結果、自

分が何かをつかむ。自分の中にきちっと持てる材料をいっぱい作っていく。そういうことができることは、人間的自由を拡大していくことにつながるのではないか。

9. 演技文化論／感じた美しさを人に伝える
- ・だから、僕たちはよく演技論というか演技文化論の中で、「美しいと感じた心は自らもそうありたいと願うのと同時に、必ず人に伝えたい」と言う。
 - ・小さい子たちが美しいと感じたとき、そう簡単に「ああ美しい」とは言わない。「かっちょいい」とか「おもしろい」とか、そういうことばで発する。
 - ・その子の心の中である美しさを土台にことばと意味が成立する、そして、それらを自分の中に取り込んでいくというのは現実のコミュニケーションの重要なポイントになる。
10. 芸術論／乾孝／芸術教育
- ・大人が芸術と思ったものを子どもに押し付けても、子どもは芸術だと思わないことが少なくない。
 - ・押し付けの芸術教育ではなく、真に意味のある芸術教育を子どもにすべき。この問題提起を一番最初してくれた先生は乾孝先生だと思う。
 - ・「ああ素敵！」とか、「ああ美しい！」ということに心が震える。そういう人間の輪をたくさんつくっていくことは、必ず人間と人間のコミュニケーションをもっと豊かにし、もっと人間の生活の豊かさをみんなで作ってあげていくことである。そういう人間関係ができていくために芸術教育が重要な鍵を握っている。乾先生はそういう言い方をしているような気がしてしかたがない。
 - ・われわれが人間らしくなっていくためにどうしても大事なものは文化・芸術の力である。
11. 幼児教育
- ・ヨーロッパでは芸術教育をきちっとしている。文化芸術を大事にしている。同時に、

幼児教育についての考え方もしっかりしている。フランスや北欧はアメリカのテレビ番組による早期教育に対して批判的である。物や数や色の認識は時間をかけて何度も繰り返す中で子どもが自ら掴み取っていくものだと考えている。

- ・幼児期は、最も体を使っていろんな感じ方をいっぱい自分の中に蓄える時期である。ことばを獲得していく過程の中で、同じことばでも微妙な違いがあるということに気づき、感じ方に幅が出てきた子が、俳句とか詩が書けるようになるのではないか。そうした子どもが、ちょっとしたことばの並べ替えとか、ことばのニュアンスを上手にまとめて、短いことばでものすごいイメージを誰の頭の中にも膨らますことができる。典型的とか象徴ということを感じる体験のない子どもは俳句も詩も作れない。

Ⅳ 結果—学生の手記から—

学生が人形劇の巡回公演中、1日目と2日目の終わり書いた手記をもとに、彼女らの気づきを意味単位に分けたところ全部で179あった。分類作業では、初めに「人形劇記録用紙」に書かれた文章からキーワードを抽出し、次に類似のキーワードをひとつのグループになるよう分類したところ10グループが得られた。さらに、大分類を試み、認知(83)、意志(61)、感情(36)の3つのカテゴリーをつくった。以下に主なグループの代表例を示す。グループの見出しの右側にあるカッコ内は含まれる意味単位の数である。

1. 認知

(1) 気づき (53)

①病棟保育

- ・どこで、何時から上演するか、だれが病室に行くかなどを全員が把握し、臨機応変に行動する大切さを感じた。
- ・病室の状況などから、その子が好きなものや興味あるものを見つけて、それについて話をする子どもとの反応もよいことを実践を通して学んだ。

- ・病院には様々な症状の子ども達がいて、いろいろな病気とたたかっている子ども達に対して、ただ何かを行って自分の満足だけで行うことはいけないと思いました。

②人形劇

- ・観客のことを第一に考えた人形劇をつくっていかねばいけないと思った。
- ・人形劇のおもしろみは、演じ手と子ども達との間の適度な緊張感にある。

③子どもの反応

- ・司会役は子ども達（見ている人たち）の表情がわかるから緊張するということもあるけど、人形操作担当の先輩方は表情がわからない、見えないからこそ、もっと緊張するんだろうなと思いました。
- ・小学生高学年の子達は、幼い子ほど人形劇にいくつとこの感じではなく、椅子に静かに座り、落ち着いて眺めているという印象を始めは受けました。
- ・一つ一つの動きに意味がある、というのは本場で、どんな動きも不自然になってはいけないと感じました。

④チームワーク

- ・今日の公演では、特に、人形劇というものは、本当にみんなの力が合わさって一つのもが出来上がり、成り立つものなのだという感じました。

⑤スキル向上・丹下氏の指導

- ・先輩達の劇は、丹下先生のご指導の後、ぐんと上手になっているのがとてもわかりました。一瞬で子どもも大人も人形劇の世界にひきつけることができ、本当にすごいなと思いました。
- ・人形劇の練習を見て、丹下先生が手直しされるたびに、人形劇たちの動きが良くなり、表情が表れてくるように思えました。

(2) 評価 (30)

①子どもの反応

- ・子ども達目がとても劇に集中していて、見ながらリズムをとったりしていて、すごく楽しそうでした。
- ・1日目の病院とは反応が違っていました。

- ・「なかよし」の時、たまちゃんが「だめだよ、だめだよ」って繰り返したり、「大きなカブ」の時に「うんとこしょ、どっこいしょ」と言ったりするところで子どもがとても笑ってくれてました。

②人形劇

- ・本当に人形が活着しているみたいで、特に「なかよし」では、一人の人が演じているとは思えないぐらい人形同士の会話が成立していて、すごいなあと改めて思いました。

2. 意志

(1) 反省 (36)

①自分の動き

- ・タイミングが「これでいいのかな」と思いながら演じていたので、劇の中で間があいてしまったかもしれないと思いました。
- ・病棟回りでは、うまく反応をとってこない、どうしていいかわからずに、笑っているだけのときがあって、何もできないときがありました。
- ・上演前、子どもの誘導がうまくできなかったことや、自分から動くのではなく、まわりのスタッフ（学生）の様子を見てから動いていたことなど、自分自身の反省はたくさんありました。

②病棟保育

- ・今日は子ども病院での上演だったので、もっと入院している子どもの状態や上演する場所などに合った演目や演じ方を学ぶべきだったと思った。
- ・点滴をしている子どもの前で「手を上に上げて」という言葉一つでも気を使わなければならぬと感じた。

(2) 課題 (24)

- ・相手のニーズにあわせ、思いやりをもった演じ方ができるには、どうすれば良いか。今日の本当に貴重な体験を忘れずに考えていきたいと思います。
- ・病院の中の子ども達は、動けない子どもなどもいて、様々な状態の子ども達が楽しめるためには、私達が人形劇のレパトリーを増やし、多くの知識を持たなければいけ

ないと思いました。

- ・目の前にいる子ども達に合わせた声かけや手遊びができるようになりたい。

3. 感情

(1) 嬉しい・楽しい (9)

- ・演じながら、子ども達からの声（リアクション）が聞こえたとき、とても嬉しくなりました。
- ・ポスターを貼っていたときから子どもたちが楽しみにしてくれていたのを聞いて、とても嬉しく思った。
- ・演じているときに役になりきれて、以前より役が楽しく感じた。

(2) 緊張 (8)

- ・初めての舞台でとても緊張しました。

(3) 意欲 (7)

- ・人形劇を初めて見た子どもは自分たちの人形劇が子どもの人形劇のイメージとなると思い、本当にうれしいと思う反面、もっと楽しい人形劇を演じないと、という思いになった
- ・自分自身ももっと勉強しないといけないと思ったし、子どもと触れ合って多くのことを吸収できたらいいなと思いました。
- ・自分も人形劇を通して子ども達と楽しいときを共有したいと感じた。

(4) 支え (3)

- ・まちがえても先輩方がフォローして下さって、なんとかできました。

(5) 不安 (3)

- ・セリフが飛んでしまったらどうしようと不安を抱えながら本番に臨みました。

(6) その他 (3)

- ・子ども達の笑っている表情や汗だくになりながら一生懸命演じている姿を見て感動した。

V 考察

面接調査の結果から、丹下氏の子ども観、人形劇論、芸術文化論について考察してみる。「10. 芸術論／乾孝／芸術文化論」で記述したように、

丹下氏は乾孝の影響を受けていると考えられる。乾の著作を読み、その考えを自らの芸術論、芸術教育論、芸術文化論の核としている。子ども観や人形劇論についても面接調査における丹下氏の語りの中に、乾の本にある文章がほとんどそのままの形で出てくる。例えば、Ⅲの第1節、第4節と本稿の「はじめに」で引用した乾の文章と比較されたい。こうした符合は、乾の考えが実践に根ざしたものであることと同時に、丹下氏が自らの実践指針として乾の理論を学び、自らの実践を通して確かめ、自分の血や肉としていったことを物語っていると考えられる。なお、言説から彼が発達心理学、知覚心理学、認知心理学の比較的新しい成果と概念を学んで自らの人形劇論をつくりあげていることが伺えるが、これに関する詳細な論考は他の機会に譲ることにする。ここでは、丹下氏の旺盛な知識欲と心理学関係、教育学関係の人脈の広さがこうしたことの基盤となっているだろうと推察するにとどめておく。

巡回公演に参加した学生のすべてが丹下氏から人形劇指導を受けたわけではない。「保育技能演習」は4年生対象であるので12名中8名はまだ履修していない。もっとも、巡回公演に参加した3年生は4年生から部分的な指導を受けており、巡回公演で人形操作を担当した者もいる。従って、上にあげた学生の気づきは丹下氏の直接の指導効果とみなすことはできない。しかしながら、巡回公演1日目の午前中に「なかよし」と「大きなかぶ」の演技指導を丹下氏から直接受けるか、あるいは、指導風景を見学している。また、3年生の指導にあたった4年生は丹下氏から授業中に熱心に教わったものを伝えようとしており、間接的にはあれ丹下氏の指導が彼女らにも及んでいると言ってもよいだろう。それでは、丹下氏の指導は学生にどのような影響を及ぼしているだろうか。

丹下氏の指導の効果として第一に言えるのは、丹下氏の指導力、すなわち人形劇指導の的確さである。巡回公演1日目の午前中の指導を見学していた学生のうち2名が、「先輩達の劇」が、「丹下先生のご指導の後、ぐんと上手に」なっ

ていくのを、あるいは「丹下先生が手直しされるたびに、人形劇たちの動きが良くなり、表情が表れてくる」のを目の当たりにして、手記に書いている。こうした指導により学生は自信をつけ、子どもたちの前に行くことができたと言えるだろう。

第二に言えるのは、丹下氏の子ども観にみられる子どもの豊かで多様な反応を注意深く観察して理解しようとする態度であり、子どもに対する感受性の細やかさと芝居の柔軟性である。丹下氏の人形劇は、子どもが内言を心の中で発する「間」を子どもに与え、ストーリーと人形の動きの妙によって子どもに次の展開を予測させ、期待をもって待ち構えさせ、思い通りの展開に子どもが満足しつつ微笑んだり大笑いしたりできる場面をいくつも盛り込んでいる。学生に対する人形劇指導においても、「間」の大切さ、動きの変化の大切さを強調しながら、演技を磨いていく。こうした指導の中で、学生も子どもの反応に意識を向けること、そして舞台の中から見えない子どもたちが人形劇にかかわる様子を想像させ、心の中に思い描いた子どもを心眼で見据えさせることにより、確かな問合いと絶妙な変化を人形劇にもたせていこうとする。これにより、巡回公演で見学にまわった学生が書くように「人形が本当に生きているように」見え、子どもが人形劇に集中し、とてもよく反応し、とても喜んだという状態となったのだろう。

第三に言えるのは、丹下氏の指導は個々の学生に合わせたものであり、決して学生を型にはめたり、無理やり自分の流儀をおしつけようとするということである。そうすることによって、学生の多様性・個別性を尊びつつ、子どもとのやりとりを楽しみ子どもとのかかわりあいから学んで技術を獲得していくことを率先垂範し、適度で的確な助言により示唆を与えながら、そうした姿勢が習慣化するよう導く。押し付けず、こちらから出かけていき、環境を用意し、折を見計らって誘い出し、導く。これは、倉橋(1965)が説く保育の基本に通じるものと考えられる。

学生が手記で示した気づきや学びは、確かに、丹下氏の指導に関するものより病院で上演した

ことによる経験に関するものが多い。巡回公演の最初の2日間は2ヶ所の子ども病院で行った。とくに2日目に訪れた病院では、狭い病棟内のプレイルームやベッドサイドで病気の子どもたちの前で人形劇を演じた。参加者全員にとって、こうした経験は初めてのものであった。その上、人形劇の上演経験も1~2回、あるいは、初めてである学生ばかりであった。1日目の病院では大きな部屋に舞台を設け、子どもたちは舞台からかなり離れたところに座って人形劇を観た。これに対して、2日目は子どもとあまり距離のない状態で人形劇を上演した。芝居の中で皆で大きな声を出したところ、見ていた子どもが一瞬けいれんを起こしそうになるなどのトラブルもあった。幸い付き添いの看護師の対応で何事も起きなかったものの、学生も引率教員も緊張した。こうした経験のため、多くの学生が2日目の経験について、すなわち入院中の子どもたちの前で人形劇を演じることの難しさやその際必要な子どもへの配慮などについて手記にした。しかし、その経験はネガティブなものばかりではない。2日目の重く辛い経験から学生は多くの気づきと学びを得た。入院中の子どもに人形劇を見せることの意義やその際に必要となる事前準備、豊富なレパートリー、臨機応変な対応について述べている。さらに、病棟保育や人形劇のスキルについての学習の強い動機づけが手記から伺える。

学生は丹下氏からの人形劇指導と「大丈夫だから自信を持って演じてきなさい」という後押しを受けて実践に臨んでいる。子ども病院という実践の場は、観客が「病気の子ども」であり、学生にとっては未経験の「病院」という空間であった。学生にとっては人形劇を演ずるという初めての行為と人形劇に対する反応を予測しにくい観客を対象に、人形劇を演ずるのに適していない空間で演じた気づきであった。全く人形劇を演じたことのない学生たちが10数回の授業により、あるいは、そこで学んだ学生による数回の指導により、子ども病院での公演を含む巡回公演が混乱せず終えることが出来た。それは人形操作の基本を学び、学生個々が個々の動き

に応じた指導を受けることによる自信が、安定した上演活動となったからだと考える。

おわりに

保育者養成大学の授業に人形劇を導入することの意味は、単に学生が保育者となった際に幼児教育・保育の現場で人形や人形劇を通して保育したり、子どもたちとかかわったりするためだけではない。丹下氏から人形劇の指導を受けた学生が示したように、さまざまな気づきを得、そこから一人の人間として成長する。さらに子どもに人形劇を観せようと工夫・研鑽する学生の感受性と状況対応力、すなわち、基本的なコミュニケーション能力を高めると考える。丹下氏が尊敬し、自らの芸術文化論の礎としている児童心理学者であり人形劇人であった乾孝が『人形劇の出発』の中に書いている次の一節を本稿の結びとしたい。

「見ている子どもたちの反応を謙虚に受けとめ、更に、自分たちの脚本を手直ししていく、あるいはその次には、またもう一段子どもに迫ったものを作っていく。そういう形で、いわば、自分たちの創った舞台の中で、子どもたち自身と出会い直しをすることによって、私たち自身も変わっていく。子どもについてのイメージ、自分自身の生き方に対する反省もその中から深まってゆく。そこに、人形劇が大きな利点を持っていることを、忘れないようにしましょう。」
(いぬい (1979)⁴⁾, 177頁)

謝 辞

丹下進氏には人形劇を指導していただくとともに、面接調査に協力していただきました。また、「人形劇の図書館」館長湯見英明氏には資料収集にご協力いただいた上に、人形劇史に関して情報提供をいただきました。お二人の先生のご厚意に心より感謝いたします。

なお、本研究は平成18・19年度科学研究費補助金(萌芽研究)「子どもの情緒と社会性の発達支援に関する予備的研究(課題番号 18653118)」(代表 米谷 淳)から補助を受けて行いました。

注

- 注1) 齊藤(1988)¹¹⁾によれば、大正末期から昭和初期にかけて関西の「トンボ座」「フタバ座」「お伽文楽」「P人形劇場」「京都影絵座」などの「新興人形劇」が子どものための人形劇を演じたが、保育に人形劇を導入したのは倉橋惣三であるという。
- 注2) 例えば、岐阜聖徳学園短期大学幼児教育学科では、1966年の開学以来、児童文化研究・発表という取り組みの中で脚本・人形の作成から稽古・演出・広報・記録・脚本集作成までの人形劇制作過程をグループ単位ですべての学生に経験させており、1980年から2003年までに人形劇脚本集に発表された脚本は合計513件にのぼるといふ(熊田2005)¹²⁾
- 注3) いぬい(1971)³⁾も「人形を大喜びでみなさんの前で見せるくらい心が広がったこと、そこまで私の心に豊かさを授けてくれたのは、人形劇サークルというものだと思うんです。」と述懐している。
- 注4) K女子大学における平成18年度のカリキュラムの概要と丹下氏の授業の様子、及び、授業とその後の人形劇公演に参加した学生に対する面接調査結果については米谷・棚橋(2006)¹³⁾を参照されたい。
- 注5) N保育園での人形劇公演では、「なかよし」、腹話術を含む4つの作品を丹下氏単独で演じた。

引用文献

- 1) 菊池ふじの・徳久孝子, 幼児のための人形劇芝居の脚本, フレーベル館, 1930.
- 2) 沖明子, 倉橋惣三と「お茶の水人形座」—幼稚園における人形芝居事始め—, 舞々, 20, pp. 16-37.
- 3) いぬいたかし, 子どもたちと芸術をめぐって, いかだ社, 1971.
- 4) いぬいたかし, 人形劇の出発, 1979.
- 5) いぬいたかし, 人形劇と子どもの心理 つきはなした見方とつきあわした見方, 日本の人形劇人, 33(2), pp. 10-11, 1963.
- 6) 三宅菜穂・向平知絵, 保育現場における人形劇活動—丹下進の人形劇を中心に—, 京都女子大学家政学部児童学科平成18年度卒業論文, 2007.
- 7) 守山 均, 保育者養成教育における基礎技能のあり方に関する研究(NO.4)—新旧カリキュラム生の調査結果の比較から—, 岡崎女子短期大学紀要, 39, pp. 41-48, 2006.
- 8) 高橋哲郎・富永 築・中村愛美, 幼児教育現場と連携した実践的な保育者養成のプロジェクト(I), 精華女子短大研究紀要, pp. 1-14, 2006.
- 9) 丹下 進, (シリーズ・子どもとつくる44)人形劇をつくる, 大月書店, 1996.
- 10) 倉橋惣三, 幼稚園真諦, 倉橋惣三選集第一巻,

- pp. 7 - 122, 1965.
- 11) 齊藤尚子, 保育における人形劇の導入と展開についての史的検討1. 保育へ人形劇を導入した倉橋惣三, 日本保育学会大会発表論文抄録, 41, pp. 180 - 181, 1988.
 - 12) 熊田武司, 保育者養成校における人形劇制作の一考察—児童文化研究「人形劇脚本」の変遷から—, 岐阜聖徳学園大学紀要, pp. 39 - 66, 2006.
 - 13) 米谷 淳・棚橋美代子, 丹下進の人形劇に学ぶ—京都女子大学「保育技能実習」の特色ある取り組み—, 大学教育研究, 15, pp. 15 - 36, 2006.
 - 14) アラン・J・レイマン著 米谷 淳訳, 認知構造枠組内部の振り返りの促進: 理論, 研究, 実践, 大学教育研究, 6, pp. 27 - 40, 1998.
 - 15) 米谷 淳・棚橋美代子, 保育者養成のための教育プログラムに関する実践的研究(1)「保育技能実習」の授業観察をもとに, 京都大学高等教育研究開発推進センター第3回大学教育研究フォーラム, 2007.

Abstract

Using Puppet Play in Training of Child-care Specialists: Tange's Lesson of Puppet Theater Play

Nowadays, a lot of nursery nurse schools subject their students to produce and play puppet theater play in kindergartens in their curriculum. However, nursery nurse schools which adopt professional puppet players to teach their students how to play it, although there may be lots of important meanings in their teaching. The purpose of this study was to investigate into the meanings and the effectiveness of leaning puppet theater play from an experienced professional puppet player in training of child-care specialists. The interview was conducted to a famous puppet play player, director, and teacher, Mr. Susumu Tange (Musubi Za) in order to study his theory on puppet play, child development, and performance arts. As the results of qualitative analysis of Mr. Tange's talk, it was indicated that he owed his theory mainly from a famous Child developmental Psychologist, Takashi Inui who wrote many books about puppet play on the basis of his experiences as an amateur puppet player. After Inui, Mr. Tange thinks that puppet play is better than

drama play in developing sentiment and social skills of young children. Mr. Tange also accents on empathy of puppet player to perceive children's feeling and their inner speech in watching puppet play as well as timely action of puppet player to children. After writings of students who were directly and indirectly taught puppet play by Mr. Tange were analyzed, it was suggested that the synergy of Mr. Tange's teaching and doing by learning training program of puppet play might have occurred in performing puppet theater play in front of sick children in hospitals. The writing indicated that the students participated in the practice could learn deeply the meaning of puppet play for children, growing as a man and being motivated into further learning of child-care as well as puppet play. It was concluded that learning from puppet play from experienced professional puppet player is much more meaningful than only doing by learning program of producing puppet play and play it in kindergarten in a group.